タケルは剣をふりまわし、
バッサバッサと
まわりの草を
なぎたおしました。
「こうすれば　火が
燃えうつってこないぞ。」
それから
ヤマトヒメのことばを思い出しました。
「そうだ、オトタチバナ、袋を開けてくれ。」
「はい、中には二つの石が。
これは火をおこす火打石。
やってみましょう。」

カチッカチッと
石どうしをぶつけると
火花が出て草に燃えうつりました。
その火はぐんぐん大きくなり
役人たちに向かって進んで行きました。
役人たちは大あわて。
「あれー、
こっちが火に
囲まれてしまった――」
「助けてくれー、
あついよー、
あついよー！」
こうして
ふたりは助かったのです。

突然、
ピカッ・・・・ドーン！と雷の音が。
風が吹き始め、
海が荒れ始めたのです。
波はふたりに
襲いかかってきます。
「オトタチバナ、
だいじょうぶか？
しっかりつかまれー」
「私はだいじょうぶです。
タケル様、海の神が怒っているんです。
神の怒りを
しずめなければなりません。」
「それにはどうしたらいいんだ？」

オトタチバナヒメは船の舳先に立ちました。
「私が海に入れば
神は心をしずめてくれます。」
「なんだって？」
「タケル様、ここでお別れです。
あなたのふるさとへいっしょに行けないのは
残念です。
でもあなたは
ご自分の使命を
果たしてください。」
オトタチバナヒメは
海へ飛びこみ消えていったのです。
「オトタチバナー！」
やがて海は穏やかになりました。
タケルは無事に岸に着くことができたのです。

タケルのからだはボロボロです。
火の中で焼けそうになったり、
海に沈みそうになったり、
そして数々の戦いをのり越えてきたのです。
あちこちに傷を負い、
足はガタガタ、
つえがなくては
歩けません。
木の下に腰をおろすと、
タケルは立ち上がることが
できませんでした。
「ああ、残念。
ふるさとに帰りたかったのに。
父さんに会いたかったのに。」

「やまとは国のまほろば　たたなづく
山ごもれる　やまとし　うるわし」
こう歌を詠むと、
タケルは横たわり
目を閉じました。
その目は二度と開くことは
ありませんでした。

するとどうでしょう。
タケルのからだから
白鳥がすーっと
飛び立ちました。
タケルの魂が白鳥になって
大和に向かって
羽ばたいていったのです。

青垣